湖上の煎茶会

錦繡の奥日光、中禅寺湖畔にて

綾錦をまとった奥日光で秋の一日、
風雅な煎茶会が行われました。
中国や日本の古玩・名器を揃え、
主題は、能の『紅葉狩』です。
亭主は茶の湯も嗜む今数寄者、潮田洋一郎さん。
「作法にとらわれず、自由に南画や漢籍を
味わい、野趣を愉しむのが煎茶」といいます。
中禅寺湖に面した、モダンでシャープな
ゲストハウスは、まるで現代の桃源郷。
知の宇宙に遊ぶひとときが始まります。

中禅寺湖畔に建つ潮田邸は、
護岸代わりにテラスデッキを張り出し、
中庭に湖水を引き入れるという
贅沢な仕様。
国立公園内にあってウォーターフロントにある
民間の住宅は2軒のみという最高の場所。
スコットランドの湖沼地帯のようなこの一帯は
10月ともなれば辺りは紅葉に包まれる。

さざ波の音だけが聞こえる静謐なとき

中庭を望む1階の広い居間での本席。
2幅の掛軸は、柳沢淇園（きえん）筆。
晩唐の詩人、杜牧の漢詩を書いたもので、
広い室内に堂々と見事に納まっている。
本日の会は、能の平維茂（たいらのこれもち）の
『紅葉狩』にちなんで。
右ページは、亭主を務める潮田洋一郎さん、
お客さまは、右から後藤康雄さん・加寿子さん夫妻、
奥さまの潮田正子さん。

湖の上にいるかのような前席〝カプロローグ

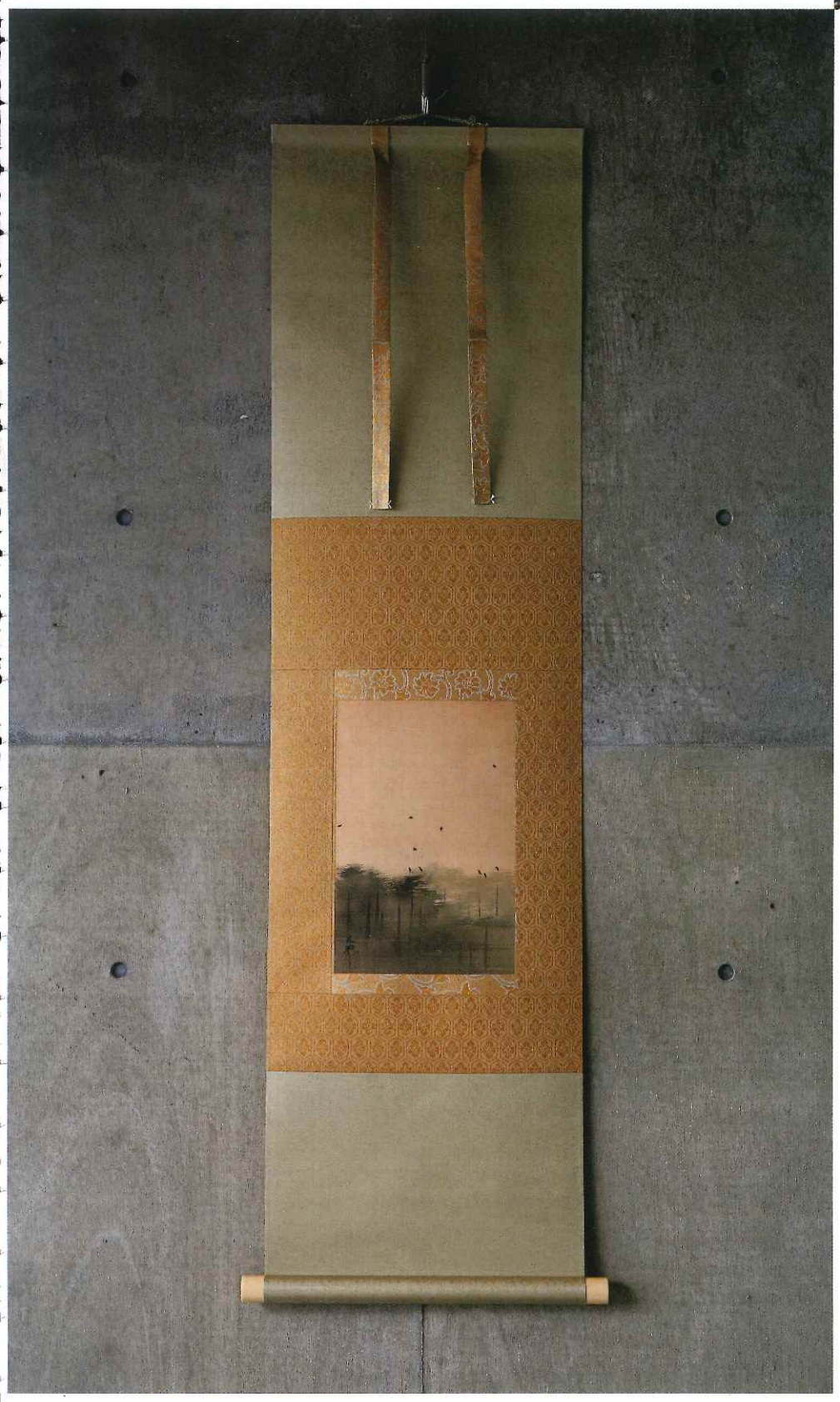
東京からわずか一五〇キロというのに、奥日光・中禅寺湖畔は、もう紅葉真っ盛り。澄みきった空気の中で山の紅葉が真紅に黄色に緑にと、淡く濃く、色を塗り重ねたように美しく、色のシンフォニーを奏でています。

潮田洋一郎さんのゲストハウスは、かつて各国大使館の別荘があった国際的な避暑地にあり、中禅寺湖のまさしく汀（みぎわ）にある建物。あたかも水の上にいるかのような湖との一体感があります。しかも部屋ごとに、床の高さや窓のとり方を変化させて、異なった水景色を初めから意図してつくられているのです。

完成から三年。昨秋、ここの紅葉を初めて見て、その鮮やかさ美しさに感動した潮田さんは、紅葉狩りをテーマに煎茶の会を催したいと心積もりしてきました。

茶の湯と煎茶の両方を嗜む潮田さんですが、この別邸にはあえて茶の湯の数寄屋茶室をつくらなかったといいます。

「頼 山陽が住んだ〝山紫水明処〟、あの明るく景観の開けた風情を思い浮かべたんです」。



上・浴室前庭にも
1本のもみじが、美しく
印象的に枝を広げていた。
左・横山大観の「墨彩秋靄帰鴉図」。
明治時代に日本で実験的に表現された
朦朧体と呼ばれる画法で描いている。
林の中を鳥たちが飛ぶ夕暮れ。
はっきりした輪郭線を描かずに、
もやっとした光や空気を表現した。
会席に掛けられた、
菱田春草の「着彩高士観瀑図」(P.82)も朦朧体。
ライバル同士の朦朧体画法で、
もともと対幅として考えられ、
会の始まりと終わりの対をなす。

〝山紫水明処〟は、山陽の書斎兼茶室。鴨川に向けた開放的な空間で、彼は友人を招いては、心ゆくまで自由に煎茶を愉しんだのだとか。この開けた眺めこそ煎茶にふさわしいと考え、湖畔が紅葉に色づく時期を待って、念願の煎茶の会が催されました。

お客さまには、「はごろもフーズ」取締役会長の後藤康雄さん、料理研究家の後藤加寿子さん夫妻をお招きしました。茶の湯に詳しい後藤夫妻ですが、煎茶の席に呼ばれるのは、初めてのこと。「今日は、とても楽しみにしてまいりました」と加寿子さん。

まずは前席にご案内です。茶の湯でいえば寄付。横長に切られた窓からひと続きに見える湖面は朝の穏やかな陽射しに、さざ波がきらきらと光っています。グランドピアノと倉俣史朗の赤いソファがインパクトを添えており、「モダンな空間なのですね」と加寿子さん。「中国から入ってきた煎茶は、文人趣味の茶。本来は書斎で楽しんだ〝椅子の茶〟なので、自由で様式がないんです。こういう空間でもできるという意味では、現代性があるのでしょう」と潮田さん。

掛物を拝見した後藤さんは「これ、大観の朦朧体ですね」と。夕暮れの林で飛び交う鳥たちを描く「墨彩秋靄帰鴉図」。エッジをぼかした墨絵が会の始まりを告げています。

本席は階段を上り、一階の広々としたリビングルームのフロア。ここの開口部は、湖に面した中庭へ向かって全開。ボートで漕ぎ出せるプライベートな入り江を見渡せます。

壁面中央には、実に堂々とした雄渾な書幅が掛けられ、お客さまを迎えます。日本で最初に文人趣味に傾倒した柳沢淇園（きえん）の書です。

車を停めてそぞろに愛す楓林の夕暮れ
楓葉は二月の花よりも紅なり

「真っ赤に燃え立つ林を詠んだ漢詩ですね。紅葉を愛でる茶会に、ふさわしいですな」

頷きながら、着席する後藤さんです。

一見、シンプルなコンクリートの
箱建物のように見えるが、
光の入り方や空気の流れまで
緻密に計算したうえで、
部屋のサイズが検討されたという
心地よい空間。
潮田邸はその名も「On the water」。
前席で、お招きした後藤夫妻を囲む潮田夫妻。

煎茶を愛した文人、柳沢淇園にちなんで

「今日は、お能の平 維茂の『紅葉狩』をテーマとしたんです」

そう話しながら、丁寧に茶を淹(い)れていく潮田さん。お運びは、潮田さんの師匠、佃 一輝宗匠です。

一煎目が入りました。古染付の小さな碗は「飛馬(ひんま)」という銘です。

「飲み方のお作法はあるのですか?」と潮田夫人の正子さん。

「自由なんです。ブランデーを嗜むように、一口、口に入れて、口中に広げていきます」と宗匠。「おいしいものだね、甘みがあって」と後藤さん。

六煎ほど淹れると、苦みが次第に増して甘み、苦み、渋みへと、味が変わります。お菓子は、ちょっとした苦みの後で出されました。

「煎茶のお花は自由なんですか?」。加寿子さんが、宗匠に尋ねました。茶の湯では決して生けない、枯れきった敗荷(やれはす)なのです。

「煎茶の花は、文人花といって、自然をそのまま書斎に移します。そこにテーマを秘めて……」

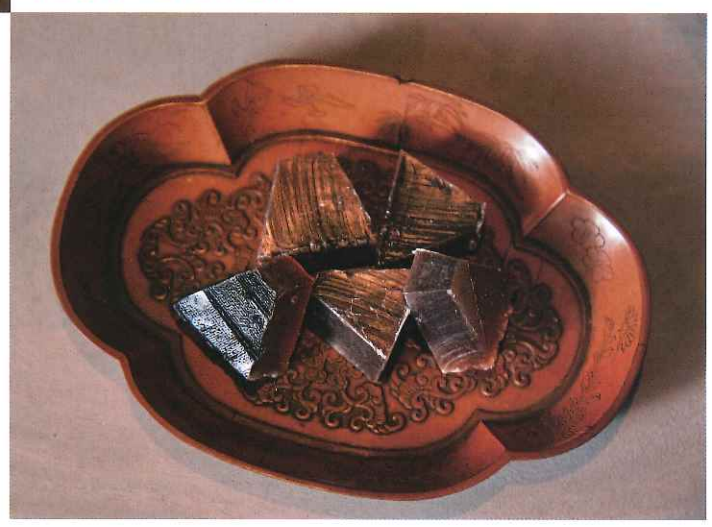
「されば仏も戒めの……邪淫妄語ももろともに。恋心から始まって、実は鬼でした、というのが『紅葉狩』。恋が終わって無残な状態の象徴です」と潮田さん。

なんと奥が深いこと! 蓮を音読みにすると〝レン〟。恋なのです。『紅葉狩』の囃子が耳もとで響いた気がする今日の煎茶席でした。

右・1煎目の煎茶をお客さまにお出しする佃 一輝宗匠。濃く甘くとろりとした茶味を舌頭に落として楽しむ煎茶は、手のひらに包み込めるほど小さく雅趣に富む茶碗を用いて味の変化にも興じる。

下・本席が終わって、潮田さんの周りでお道具を拝見するお客さま。「本当に小さなお茶碗で、お抹茶とは違いますね」と正子さん。もともと茶器と酒器は兼用だった。道具は、中国渡来の唐物を重んじるが、これだけ古い道具に徹することは稀有。

下・お菓子は、「末廣屋一祐」謹製。煎茶菓子は宗匠が考案して依頼。水飴につけて1週間ほど乾かした菓子で、菓銘「楓林晩」、茶銘は「二月花」。器は菓子器専用という使い方ではなく、文房具を転用。お盆を台にしたり、印材を置いたりして使う。



左ページ右上・敗荷を瑠璃釉象耳四方の器に。後藤加寿子さんが驚かれた、枯れ果てた蓮の挿花。煎茶自体が、おもてなしの茶ではなく亭主も楽しみを共有するもの。花も迎え花ではなく文学的テーマがある。同右下・お茶は、宇治茶の玉露。現代のお茶は甘みが強すぎるので、明治初期の「彩雲」の味を特注。同左上・急須は紫泥で、高火度で焼かれ、世界で最も美しいとされる。茗碗は、明末の古染付。「天高く馬肥ゆる秋なので〝飛馬〟の銘碗を。天空を飛ぶペガサスにちなんで」と潮田さん。同左下・手前の茶巾入れは、乾隆硝子。べっ甲のような存在感がある。

会席はモダンに、秋を映すフレンチで

潮田さんを囲んで、お道具談議にしばし花が咲いて、場は二階の会席へと移りました。

ダイニングの席に着くや、後藤さんが「素晴らしいロケーションですね。部屋によって湖の見え方が違って。寄付は大徳寺孤篷庵の忘筌の間を意図しているんですね」と絶賛。

男体山を眼前に、今日は「レストランひらまつ」のシェフが作るフレンチです。「桜鯛に対して、紅葉の頃の紅葉鯛を使ってもらいました。キーワードが紅葉狩りですから、謡の〝林間に酒を温めて紅葉を焚くとかや〟を趣向に、料理も考えましてね」と潮田さん。

鹿児島県串木野産の天然真鯛を熟成させて、塩釜に仕上げたのだとか。まさに紅葉鯛を海藻とハーブの香りで薫いたというわけです。

煎茶には、手前や作法とは別に、漢詩や絵解きなど自由闊達に風韻を楽しむ知の世界が広がっていました。おいしい料理に舌鼓を打ちながら、話題は明治中頃までの、侘び茶とともに煎茶を愛していた文人や数寄者へと広がります。

上・大パノラマの景色が広がるダイニングルーム。一同シャンパーニュで乾杯。中禅寺湖の大きさ、凡庸でない景色に、あらためて息をのむ。途中で霧がかすかにかかってきて、幅10㍍を超えるガラス窓が、ドラマティックに時間の推移を映し出す。右下・菱田春草の滝を描いた朦朧体の絵は、華厳滝を連想させる。「人物が天空から浮き出ていて、品格がありますね」と、後藤さん。「この帽子被っている高士は、潮田君だろう」に一同大笑い。

『紅葉狩』にちなむ大きな紅葉鯛の塩釜。
丸の内のレストランひらまつ「サンス・エ・サヴール」の
シェフ・鴨田 猛さんが、松茸や毛がに、朴葉味噌など、
深山の秋の味覚とフレンチの融合を試みた品々。

紅葉を愛でる湖上の煎茶会

煎茶は、もともとは元、明、清代にわたって培われた中国文化人の趣味。日本の文人墨客に浸透し、風雅な遊びとして隆盛を見たのは江戸中期からで、器物は中国渡来の唐物を使うことが多いのだとか。わけても、今日のお道具は、珍しく貴重なものばかりです。

「お煎茶は想像以上に、中国の世界ですね」。お道具を見て感心する加寿子さんに、佃宗匠が応えます。「煎茶は、漢詩漢文の世界への憧れ。文学的な別世界に遊ぶのですよ」。

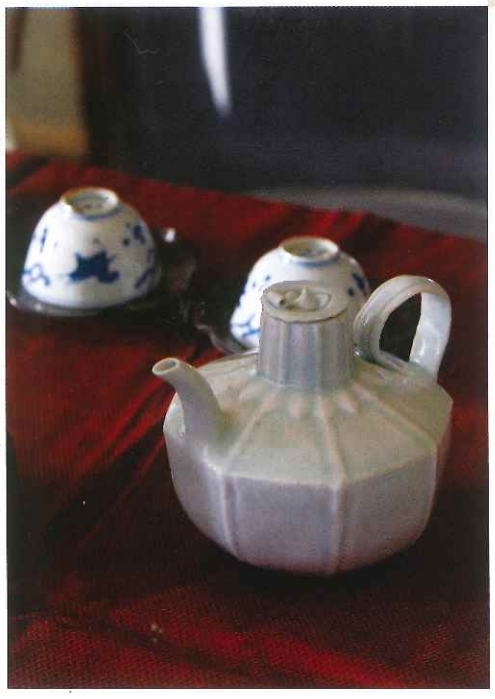
燃える紅葉に囲まれた湖で煎茶の風味を堪能し、その余韻に浸りながら味わったお道具の数々。この上なく贅沢で愉しい時間でした。

会記

前席
掛幅 横山大観「墨彩秋靄帰鴉図」 絹本直幀

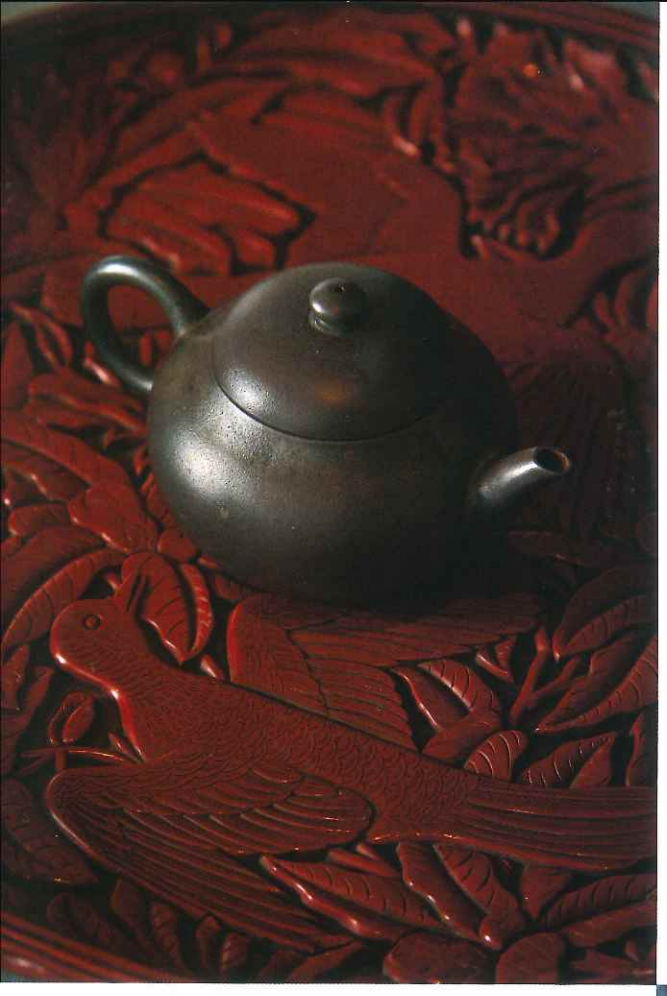
本席
掛幅 柳沢淇園「杜牧 山行二句」 紙本直幀双幅
挿花 敗荷
花器 瑠璃釉象耳四方 有檀座 乾隆在銘
涼炉 赤泥唇風門三峯炉、世云「揚名合利」 山本竹雲箱 藤田家伝来
炉座 玉璧
湯罐 白泥「宝珠」文政渡 山本竹雲箱
茶心壺 古錫菱花式 山本竹雲箱
茶量 湘妃竹 俗云「紫斑竹」
帛紗 紅地銭手更紗 伊藤博文公旧蔵

茶葉を入れる茶心壺は、
茶の湯の茶入に相当する道具。
特に錫製が珍重され、
黒みを帯びた古錫は、自然の古色で、
とろっとした
とろみのある質感が美しい。
菱花式は、菱が水面に浮いている形。
茶量は紫斑竹。表面に虎斑状の
斑紋が入った貴重な竹。



手前に必要な水を入れておく水注は、
茶の湯の水指にあたる道具。
急須に、水をつぎたしたり
するために用いられる。
これは、青白磁の阿古陀瓶。
阿古田瓜に似た形をしている。

本席の掛物は、柳沢淇園の双幅。
晩唐の詩人、杜牧の山行2句で、
上は、「楓葉紅於二月花」
〈楓葉は二月の花よりも紅なり〉、
左は、「停車坐愛楓林晩」
〈車を停めてそぞろに愛す
楓林の夕暮れ〉。
杜牧の詩では、
「霜葉紅於二月花」であるが、
淇園はあえて「楓」を
両軸に書いた。淇園は、
江戸時代中期の文人、画家。
幼少の頃より、文武諸芸に秀で、
中国の文雅を身につけ、
柳里恭と中国風にも名乗った。



水注　青白磁阿古陀瓶
巾盂　乾隆硝子　玳瑁文臺
茗碗　古染付「飛馬」　成化六字銘
托子　古錫　荷式　品泉銘
茶銚　紫泥「萬宝順記」宝珠式　山本竹雲箱
銚座　堆朱　花鳥文円盆　本願寺伝来　藤田家旧蔵
茶具褥　臙脂地縑布
菓子器　黄楊木君子文木瓜盆
銘茶　二月花　奥西緑芳園
銘菓　楓林晩　末廣屋一祐
烏府　古竹網代編四方提梁
羽箒　青鸞　象牙透文柄
炉扇　古竹平編　象牙環
瓶敷　古籐編
火箸　古鉄四方透
建水　響銅

会席
掛幅　菱田春草「着彩高士観瀑図」絹本直幀

潮田洋一郎
うしおだ・よういちろう
1953年東京生まれ。
LIXILグループ取締役会長。
東京大学、シカゴ大学卒業。
日本美術、西洋美術に造詣が
深く、茶の湯、煎茶、書、
花、能、邦楽、ピアノを
趣味とし、数寄を愛す。

紫泥の急須は「萬宝順記」。
何でもない形のようだが、
端渓の硯のように
自然なバランスが絶妙。
世界中の数寄者の憧憬の急須だ。
今回のメインの一つが、堆朱の銚座。
元の時代に作られた
本願寺伝来、藤田家の旧蔵。
裏側に断文が入るが、
朱塗りも鮮やかで
花喰い鳥が彫られ
子孫繁栄の願いが込められている。

湯を沸かす道具である涼炉も
藤田家伝来の品で
赤みがかった土が珍しい。
明末〜清初期のもので、
「世界中に、多分これ一つ」と
佃宗匠がいうほど貴重な涼炉だ。

撮影／阿部 浩
取材・文／片柳草生
着付け／石山美津江
ヘア＆メイク／野坂朱子